

<書評>近藤教授還暦記念論文集『日本文学古典新論』

著者	杉本 圭三郎
雑誌名	日本文學誌要
巻	9
ページ	46-47
発行年	1963-08-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019075

近藤教授還暦記念論文集

『日本文学古典新論』

杉本圭三郎

ことしの読書はまずこの「日本文学古典新論」からはじめたのだったが、国文学会の誌要の編集部から書評の依頼を受けようとは、そのとき予想もしていなかった。読んでから数カ月を経て書評を命じられ、再読の上、筆を執ろうと思っていたが、多忙をきわめてなかなかその機会を得られず、しかしこの書から受けた印象と感銘はなお心に尾をひいてのこっている。それを糸口に半年ほどの過去をたぐりよせて、この書物について考えてみようと思う。近藤忠義教授の還暦を記念する論文集として編まれた本書は、日本文学原論などの諸著で戦前の日本文学研究史に時代を劃する意義をもった近藤教授の業績を実質的に記念するにふさわしい内容をもっている。近藤教授が示された方法は戦後ひろく撰取、継承され、さらに批判的に止揚されて今

日の前進をみたのであるが、この論集に収められた諸篇は、研究史の現在の到達点を示す「新論」の名に背かない力作であるといえよう。本書のおわりに編集委員会のことばとして「近藤氏の功績が日本文学研究の各時代にわたり、研究上の前進を大きく刺戟してきた事情にかんがみ、各時代別に日本文学研究の新しい焦点を提出するような論文集を編むことを計画した」とあるが、その意図は充分実現されている。古代から現代にいたる。日本文学史の展開の基軸をなすような問題点へのとりくみが、それぞれの執筆者によって行われているからである。この広範囲にわたる論題のひとつひとつを全体にわたって批評することは不可能である。ここではただ、この書物によって日本文学研究への関心や興味が、さらに一段と刺戟され、意欲をかきたてられた私の感想をのべることしかできない。

本書では「古代靈魂觀念の二面」土橋寛、「『色好み』の歴史社会的意義」南波浩「江戸戯作者の精神的位相」小原元「昭和文学においての二種の知的操作」小田切秀雄などの文学史的な一過程を巨視的にとらえた論考があり、しかも教科書風の概説におわらず、重要な点をおさえて鋭い分析のうえに論がすす

められている。いずれもその時代の文学、思想を、さらに細かく検討していく前にまず展望し通過していかなければならない関門のような位置をしめる問題が扱われており、近時の国文学研究がその対象を細分化し、ときには末梢的な瑣末な域に入りこんで視界を失い研究主体そのものが矮小化される危険が指摘されるとき、ふりかえられなければならない方法を示唆している。このような巨視的把握は近藤教授によって古代文学、和歌文学、近世文学などを対象にかつて試みられたところであり、その意味でも、還暦記念論文集としてふさわしいと述べた所以である。

個々の作品・作家をめぐる研究では、まず源氏物語に「光源氏と藤壺」西郷信綱、「源氏物語の方法に関する断章」秋山虔の二篇であり、前者では作品の背後にひそむ人間史的時点での人間関係を作品の世界から遡及し、そのことによってふたたび文学内部に照明をあてようとしており、後者は光源氏四十賀の記事を中心に考察をすすめて物語の世界の転機と深化を微視的に追求しようとしている。平家物語では「平家物語の文体」永積安明「『祇園精舎』の段について」谷宏の二篇が、本質的な課題と正面からとりくんでい

る。永積氏の研究は文体の分析をとうして中世の典型的な文学の成立を論じたものであり谷氏は、平家物語の序章を検討して作者の姿勢を明らかにしようとしたものである。しかし谷氏の論でいう「作者は、平安朝の伝統的な社会体制と秩序を絶対視し永遠視している云々」というとらえ方にはいささか疑念がある。これはいづれ、谷氏の著「中世文学の達成」の平家論とともに考えていきたいと思っている。

「『小栗判官』おぼえがき」荒木繁「『竹斎』と『東海道名所記』」野田寿雄などで扱われた作品は、その世界の大きさとか、形象性のゆたかさ、とか、芸術的な完結度からすれば高い価値をもつものとはいえないが、文学史の基底によこたわる原形質のようなものを探ったり、ある時期の芸術的飛躍の展開過程を究明しようとする軽視できない意味をもつものである。とくに小栗判官は民俗学的研究の好個の対象としてしばしば論じられてきているが、作品の世界を、それをうみだした民俗的事実に還元し、その基盤の意味を問うという推論が殆んどであった。一旦民俗的事実との結び目を明らかにしたうえで、そこから成長し文学作品として成立した次元でさらに

その機能を明らかにしていく研究をと志向していたときだけに荒木氏のこの論文には啓発されるものが多かった。

「フダク渡りの人々」益田勝実は、説話研究に新たな視点をひらいたもので、仏教説話と一括されていたものをさらに質的に区分して、寺院教団の圏外にある「信仰の模索の所産」としての説話の存在を解明している。この論考は説話研究の今後により緻密な思考を促すものとして影響していくであろう。

「道元から世阿弥へ」西尾実「芭蕉と西鶴」広末保の両論は、中世・近世の代表的個性をとらえ、前者では道元の只管打坐に示される主体的な学道精神と世阿弥の生涯稽古を貫く芸能への姿勢に一つの系譜を認め、中世における人間主体の強靱なありようを中世文化と関連づけて考察したもの、後者は同時代の対峙する文学主体にいか接近するかの視点にたち、西鶴芭蕉の接点「西鶴の浅ましく下れる姿」という芭蕉のことばの検討から両者の文学方法の質を問い、文学史論の難関にひとつの道をひらいたものといえるであろう。

「道鷗論争について」久保田正文は、数次にわたってくりひろげられた論争の主要な問題が概括整理され今日の時点からの評価もなさ

れており、近代の問題についても巨視的な展望をもちたいと願う私にとって有益な論稿であった。

「独歩における『政治』」猪野謙二「小山内薫における演劇観の問題」祖父江昭二はそれぞれ、近代文学と政治の問題の結節点の解明、新劇史の発展方向を規制した小山内の模索の検討で、いずれも近代文学、演劇史の基幹をなす重要な課題とのとりくみである。

「焦点をどういうところにとらえるかは、執筆担当者自身の選択、判断に一任することにし、ただ大体の量と各時代への担当者の割り振りだけを決定した(編集委員会)」結果が上にみてきたように、各時代の中核にある問題への究明へとそれぞれ軌を一にして志向することになった点、くりかえすことになるが近藤教授の学風の発展として位置づけることができるであろう。狭く限定された専攻分野にとざされがちな我々後進にとって、日本文学史の動脈のなかに解放し、ひろびろとした視野のなかで日本文学のもつ問題の多様さ豊富さを改めて認識させるような書物として私は本書をむかえたのである。

——法政大学文学部講師——